

# 論文題名：「思想史的事件」としての「ラッセル来訪」再考 ——第一次世界大戦後における「文明」と「近代」への思索

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程

チョウ リン

ZHANG Lin

本稿は 1920 年から 1921 年にかけてイギリスの哲学者バートランド・ラッセルが大戦後のロシア・中国・日本を訪問、また滞在したことを、子安宣邦氏がいうところの「思想史的事件」と定義し、この「事件」を当該期の日・中両国のメディアと知識人からの反響だけでなくラッセル自身におけるこの経験を通しての思想変化をも視野に入れつつ、トランスナショナルな視座に基づくテキスト分析によって、立体的に描こうとしたものである。ラッセルの訪問と中国の近代化という視点に立った、あるいは大正期日本の思想界で偶然に起こったエピソードとして捉えてきた従来の研究において過小評価された当の「事件」を再考するため、本稿は横軸にラッセルの思想変化を置き、縦軸として日・中両国のメディア・知識人のまなざしに目配りすることによって、より複線的かつトランスナショナルな叙述を試みた。かかる視座からこの「事件」を見つめ返し、それを複雑系としての歴史的な文脈に還元することこそ筆者の意図であり、本稿の意義でもある。

本稿は、本論全 5 章および「序章」と、「終章」による構成をとる。第 1 章では、「ラッセルの来訪」はいかなる意味で「思想史的事件」として成立し得るのか、またその「事件」がいかに中・日両国知識人それぞれの問題意識と連動するなかで成立したものだったのかを追跡する。第 2 章では、本稿の主要考察対象のひとつとなる、第一次世界大戦後のラッセルの思想的変化の前提として、戦争開始時および戦中における彼の思想的素地を、戦中の書簡、インタビュー・著述などのテキストをもって検証する。第 3 章では、1920 年 5 月から 6 月にかけてラッセルが訪露したあとに出版された『The Practice and Theory of Bolshevism』に対する、日中両国での伝播・受容過程をみる。またこれとも関わり、ラッセル自身におけるボルシェヴィズムに対する認識の変化もたどる。第 4 章ではまずラッセルが「遠東」を訪問することに関する日中のメディアおよび知識人の反応を追い、彼の学説が紹介された意味を、両国に共通する背景および各々に固有の歴史的な文脈の両面から分析する。そのうえで、日本の言論家・知識人長谷川如是閑をとりあげ、彼がラッセルの学説を借用しつつ展開した中国改革論を、ラッセル自身による中国の将来に関する議論と比較させつつ検討したい。第 5 章では、ラッセルの訪日を取りあげ、彼が見た「近代日本」の姿とその進路についての分析を提示する。そのうえで、日本において最もラッセルの思想を接近しようとした在野の知識人・土田杏村が、ラッセルの訪日とほぼ同じ時期に展開していた日本「改造」をめぐる議論を検討することにより、両者の交差と分岐を考察する。